
蒼い月の光 ~Blue Moon Night~

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い月の光 ~Blue Moon Night~

【Zマーク】

Z7633C

【作者名】

朧月

【あらすじ】

黒羽快斗、そして怪盗キッド。怪盗と探偵。表と裏のような存在だ。蒼い月の輝く夜空に、キッドは白い翼を広げる。特殊な光をもつ宝石、Moonlightに導かれ、この表裏が今重なり合おうとしていた。CNR短編小説・蒼い月の光~Blue Moon Night~のリメイク版。是非お楽しみくださいませ。

「よし、次の獲物決定だな！」

パチン、と腕を鳴らし、その記事に赤丸をつけた。今更だが、オレの朝は新聞、つまり情報収集から始まる。

今つけた丸印は、次の獲物。日本語名で月光って言つらしこぞな……その石の特徴から、『Moon』と書いて、つづり名前がつけられた宝石が、日本で飾られるんだと。こりゃー、スルーは出来ねーだろ。

ピラリ、と記事をめくる。そこに代々と映る姿を見つけて不敵に笑つたオレを、影が覆つた。げつ、あああああ青子！？

「かーいと、今朝も随分キッドにこ執心かな～？」

「そ、そんなんじゃねーよっ！ でもホラ、昨日も活躍したみてーだな。キッド」

「ふう～ん、青子知らなかつたよ」

「いやあ～つて、怖つ！ 知らねーウケないだろ。あーあ、コイツにこの話題は禁句なんだよなあ。

「警察もキッドにはなす術なし、かあ。今度もまた随分派手に取つたんだ？」

「だーかーら、キッドに叶う奴なんかいねーつつたたり？」

「も～つ。快斗はキッドの味方ばかり。青子、キッドなんか大嫌い！」

顔面めがけて飛んできた新聞を紙一重でよけた。

「うおうと、あつぶねー！ 何しやがる、この凶暴アホ子！」

「いやって、ふざけあえてる」の状態が、オレにとって最高の時間なんだ。

……初めのキッカケがなんだったか？ んなもん、覚えてるに決まってんだろ。

オレがキッドになつたのは、親父の死の真相を突き止める為だつたんだよ。尊敬してたマジシャンの親父が、実はキッドで、しかもそのせいで殺されたなんて事実を知つちまつたから。全てを終わらせる為に始めたんだ。奴等の野望を打ち碎く為に。唯一つ、奴等の手がかりとなる、命の石、パンドラを求めて。

そうだった筈だよな？ けど、名探偵に出会つてからオレはちょっとだけ変わつた。

あの小さな体でオレを追いかけてくるアイツの正体が、実は高校生探偵の工藤新一だと、んな事はどうだつていいんだ。ただ、アイツの存在がある限り、キッドは楽しい。

アイツ、名探偵はオレに似てる。顔とか、そんなんじゃなくて。オレは親父の敵討ちの為だけど、アイツは何と戦つてんだろうな。好きな子に正体を隠し続けてんのは、辛いだろう。オレには痛いほど判るつてのこ。

あれほど強い瞳で真実を追いつづけることが出来るアイツを、心

の何処かで尊敬している。

もし、出会い方が違っていたなら、多分最高のダチだつた。それとも最高のライバルか。

オレは怪盗、奴は探偵。本来敵同士の筈だし、似てるなんて表現おかしいのかも知れねーけど。

最も近いもののような感覚すら受けれるんだ。

「快斗、どうしたのー？ もしかして、打ち所悪かった？」

ハツとして、前に視線を戻した。青子が首を傾げて、不思議そうにしている。つこさつきまで喧嘩腰だったのが、よく言ひやが。

「何でもねーよつ。あ、それより青子……今度の田曜日、空いてつか？」

「えー……と、うん！ 何があるの？」

「いや、トロピカルラングにでも連れてつてやるつと思つてな」

「ホントーー!? 行く行く！」

「んじゃ、空けとけよ。オレ多分その前の日予定あるから、ゆっくりになるかも知れねーけど」

一仕事終えて疲れた後、四六時中明るいオメーの顔は田の保養になるんだよ、なんて言えねーよな。おつと、その前に今田学校帰りに予告状出さねーとな。

……オレの正体知つたら、どんな顔するかな、こいつ。キッドを嫌う気持ちも分かるよ、そりゃ中森警部にも悪い事してるので思つ

黒羽快斗には、多少ながらず好意も抱いてくれてんだろう——^{オレ}けい。
キッドの事は絶対認めるわけねーからな……^ま、バレッこねーか。

しな。

氣楽にそんな事を考えていたオレだけど、正体がばれるやの日は、
そう遠くなかった。
まさか、黒羽快斗の姿であいつに遭遇するなんて、思つてもみな
かつた。

朧月の一言

えーと、どうも「んばんはー（< - > * ）そして、初めての方初めまして！

前にもこのお話を読んで下された事のある方は、改めましてお久しぶりです♪♪

短編だったこのお話を連載で、としたのは、まあ長かつたからという理由に他ならないのですが、

やはり私は改訂作業が相当苦手だという事がつづづく分かりました（^_^-；

かなり初期の作品です。処女作候補の一つ。（確か、といつ候補が一杯あるんですね^_^-；本当の処女作はそのうちのどれだったか、私自身思い出せない）

プロローグだけは書き下ろしです。見覚えがあるようなないような、なんじやないかな？

本編は、加筆修正の作業を中心的にさせて頂いております♪

短編時代は楽しく読んでいただけたようなので、変にヒャンソードをいじくるのもあれかな~♪

ところわけで、修正作業と並行して載せて行く事になりますが、どうぞ暖かく見守ってやって下されば嬉しいです♪

まず、数ある作品からこのお話を読みいただけて嬉しく思います♪これからもどうぞよろしくお願ひ致します♪♪

さあ、本編へどうぞ♪

蒼い月が照らす夜の街、その僅か一箇所に人が集まっている。彼らが囮んでいるのは、杯戸美術館……夜というにも関わらず、騒々しく騒ぐ人の声と、美術館を照らすライトがいつもよりまぶしく輝いていた。

人々の興味関心は、今皆一緒に唯一つ。待ちきれずにわいわい騒ぎながら、胸を躍らせ、その出現を待っていた。

そんな美術館から少しだけ離れたビルの屋上では、白い衣装を纏つた一人の少年が立っていた。ヒュー、という風の音の中に、ぱたぱたと布の揺れる音が混じる。満天の星に飾られたその美しい夜空に、マントを風になびかせて現れた。白き怪盗は、自前のオペラグラスを覗きながら、不敵な笑みを零した。

「警察のヘリが、1、2、3……、4、5……5台か」

一体を見回した景色に見えた警察部隊の配置に、自分の通る経路を再確認する。確実なプランのイメージをしつかり練った所で、彼は「よし」と小さく呟き、高々と夜空に向けて両手を挙げた。

「Ladies and Gentlemen!! わあ、今宵のショーの幕開けだ」

彼はいつも通りの鮮やかな手口でそこに忍び込んだ。警察の目を誤魔化して、その場にいる沢山の観客達の興奮した声を聞きながら、空へと去っていった。

その天才的なマジックで鮮やかに宝石を盗み出す様は、全ての人を興奮させる。人々は精一杯の憧れと尊敬を込めて彼をこう呼ぶ。

『怪盗キッド』と。

1st・白き怪盗と「宝石」Moon -Light-

キッドからの予告状が警視庁に届いたのは、先日のキッド騒動が治まつてすぐの事である。彼が指定した宝石の名前は『Moon Light』ところ。つまり日本語訳では、『月光』。その月光といつのは、つい一週間ほど前にイギリスから送られてきた宝石だ。期間限定ではあるものの、博物館に展示が決まった宝石は、博物館のオーナーによってその名前が発表された。

その美しい見た目が月の光に似ていたので、月光とつけられた。翌日予告状が届き、警視庁捜査一課ではキッド専門の中森警部が皆に活を入れていた。

「いいか、キッドは今度はあの月光を奪うと言つ予告状を送りつけてきた。なんとしても宝石を死守するんだ！」

いつに無く意氣込んでいる警察軍団は、この日のために特別に助っ人 つまり、今がまさに旬の、眠りの小五郎といふぞけた異名をもつ名探偵に捜査の援護を依頼した。

事の始まりはここからである。

予告田前田の江古田高校一年B組。ここではたった今、壮絶な争いが起きていた。壮絶というのは語弊があるつか。つまり詳細を説明するとなんて事はない。

学校一のマジシャンである黒羽快斗と、学校一のおてんば娘である中森青子がいつも通りの下らない口喧嘩をしているのだ。

「また怪盗キッドが予告状出してきたのよー? どうしてくれるのよ快斗!」

「なんでオレに言つんだよー 文句があるならキッドに言えりつてー!」

男勝りに活発な青子は掃除用具入れからモップを持ち出して振り回し、それを超一流の身のこなしの快斗がふわりふわりとかわしていく。

たまに関係ないクラスメイトが被害に遭うのは、「不幸様」といつた所だろうか。それでも夫婦喧嘩……もとい壮絶な争いは納まらずに加熱する。

「快斗はいつもキッドの味方じゃない！ 青子はあの泥棒にお父さんと連れちゃってるのに！ バ快斗！」

「なんだよ、あほ子！..」

不毛な喧嘩を繰り広げている本人達は気付いてはいないのだろうか……自分達を「また夫婦喧嘩が始まった」と言つて田で見つめる周りの視線を。

一人は、いわゆる公認カッブルというものである。だから、クラスメイトにとつては、この日常的な喧嘩は夫婦喧嘩に相違ないのだ。本人達が気付いていないかも知れないお互いの気持ちは、クラス中に知れ渡っている。一人は無自覚だが両思いだ。

ただ、クラス中の誰もが知らないことが彼と彼女の間にある。

彼……黒羽快斗のまたの名は、怪盗キッド。夜空を賑わす氣障な怪盗だ。

そして彼女、中森青子は、警視庁捜査一課の中森警部。つまり、怪盗キッド専門の警部の娘なのである。

二人が実は本来正反対の立場であるということを知るのは、怪盗キッド本人である黒羽快斗と、この学校で唯一キッドの正体を知っている魔女、小泉紅子だけだ。

さて。一方、こちらは毛利探偵事務所。

今朝早くに依頼を受けた小五郎は、いそいそと警視庁に向かう準備をしていた。身だしなみを整えて、荷物を持って、いざ名探偵出陣！ と、タクシーに乗り込んだ彼の後ろには、当然のようについてきている娘と居候の姿が。

「おい、何でお前等まで付いて来るんだよ」

「だつてー、私もキッド見たいもん。ねえ、コナン君？」

「うん……」

事件の事となると、必ずついてくるこの居候江戸川コナンの存在を、彼は田の上のたんこぶの如く思つてゐるのだ。元氣のいい返事に、今日もまた溜め息一つ。

「つたく、邪魔すんじゃねえぞ？ この名探偵への依頼なんだからな」

小五郎は呆れて二人に言つた。タクシーは警視庁にたどり着くと、三人を降ろし去つていった。

彼はやる気満々で問題の博物館へと足を運んだ。後ろについていくコナンと蘭も、送り迎えの車内で、予告状や月光についての説明を受ける。

辿り着いた博物館の一一番立つ場所に、その宝石は堂々と輝いていた。思わず、三人は息を呑んだ。

「これが、Moon Light。月光なの？ 綺麗……」

一瞬で目を奪われた蘭は、ただじっとその輝きを見つめた。

宝石の色は基本的には青なのだが、光があたると卵の黄身のように綺麗な光を回りに灯す。まるで、月そのものの色だ。何も無い所でぼんやりと青白く光るそれも綺麗だが、光を当てた時の色もなんともいえない。博物館のオーナーの企画では、朝や昼は太陽の光でこの月光を照らし、夜は全ての光を遮断して、二種類の月の光を味わつてもらおうとのことである。

だがそんな趣旨はどうでもいい。蘭はその宝石に、想つて止まない彼を重ねていた。

「まるで、新一みたい」

「え？」

隣に居たコナンが首を傾げるが、見向きもせず、蘭は優しい顔でそれを見つめる。

「何かね、新一みたいな宝石だなって思つて。あいつの瞳を見るみたい。事件の時ももちろん輝いててかっこいいと思つんだけど、普段のあの柔らくて優しい光も、私大好きなんだ」

コナンは顔を赤くした。蘭が工藤新一の事を話す時、可愛い表情を見せるのが彼の萌えどころらしい。

そして、キッドが予告した日の朝は訪れた。

夜に現れる筈のキッド対策は、朝から厳重に行われていて、それだけ月光が価値のあるものだと、三人は改めて実感させられたのだ。

コナン達が丁度警備の様子を確認している中、一人組みの高校生が顔を出した。

「凄い警備しとんなー……」じょっぷどのもんなんやな、その月光
つちゅう宝石は」

「何感心してるんや。早よ中に入らんと、入れなくなつたらどうするんや」

「そやな。行こ行こ」

二人は入り口の警備にあたつている警察官に軽く会釈した。
と、同時に何やら手厚く痛々しい歓迎を受けた後、はれた頬を不機嫌にさすりながら中へ入つていった。宝石の飾られた部屋にいる二人の姿を確認すると、口元に笑みを浮かべた。

「よお、相変わらず仲ええな」

突然声をかけられた蘭とコナンは、驚いて振り向いた。

「服つ……じや、なくて平次兄ちゃん！…！」

「和葉ちゃんも…。どうしたの？」

平次はにっこりと笑い、一人に歩み寄った。

「俺もキッド捕まえんの手伝つたらうつと思つてなあ。大阪から飛んできたんや」

「で、あたしはその付き添いや」

緊迫した雰囲気の中で、二人は明るくやう言つた。空氣の読めないのがある意味いい所らしい。

「あれ、一人ともそのほっぺたどうしたの？」

蘭の質問に、陽気な雰囲気だった二人は同時に顔を顰めた。

「……あ、ああ、これが？　これはなあ……入り口に居つた警備のおつちゃんらと、入つた廊下に居つた刑事のおつちゃんと、部屋の前に居つたひげのおつちゃんとやられたんや。何度も何度も、キッドの変装やないかって言つてな。ホンマ、失礼なやつちや！…！」

「ホンマ最っ悪やーつ。あのおつちゃん、平次はともかくアタシまで……女のアタシまで思いつきりつねつたんやで！…。信じられへんやわー！」

二人共、いかにも不機嫌な顔で頬をさすつた。よほど悔しかつたのだろう。

そして、ここは博物館からほんの少し離れたビルの屋上。既に、キッドに扮装した彼は、望遠鏡でじっと博物館の様子を眺めていた。

「名探偵が一人に、その彼女が一人……。今回の仕事は面白くなつそうだな」

彼の口に綺麗な笑みが浮かぶ。予告時間まであと一時間だ。

彼は頭の中で何度もシミュレーションしながら、博物館の様子をじっくり窺っていた。

隣に居る寺井が、心配そうに話し掛ける。

「快斗ぼっちゃん、油断だけはしないで下さいね。彼等が関わつていつも窮地に立たされる快斗ぼっちゃんを見ていると、じいは心配で心配で……」

しかし、キッドは寺井に向かつてシーカルに微笑む。

「そんな心配すんなつて、ジイちゃん。大丈夫だよ！ それに、ライバルが居ると張り合ひが出来て仕事が楽しいんだ」

「し、しかし快斗ぼっちゃん……」

「ジイちゃん！ 今のオレは快斗ぼっちゃんじゃないぜ。この世を騒がせている気障な盗つ人……怪盗キッドだ」

キッドは青白い月明かりに照らされながらもその風にマントを翻し、ハンググライダで飛び立つ。暗い夜空に白い姿が映える。後に残された寺井は、心配な顔でずっと飛び立つた彼を目で追つ

ていた。彼は寺井に見守られながら、博物館の屋上に優雅に舞い降りる。

「さーて、名探偵諸君……私を捕まえられるかな？」

不敵に笑つた彼は屋上からふわりと降り立ち、驚き困惑する警官に向つてスプレーを吹き付けた。一人、二人三人……あつという間にその場は寝かされた警官達で埋まつた。

「さあて、と」

キッドは警官の格好に扮し、入り口から堂々博物館に侵入した。

「ここのキッド様には楽勝過ぎるぜ、こんな罠

幼い頃から馴染みの、中森警部の考へている事などお手の物。次々に待ち受けているトラップを楽々クリアして、そして月光がある部屋の前でその変装を解いた。

「……名探偵たちの前でこんな変装、意味ねーからな

呟いたキッドは、堂々とその部屋のドアを開けた。

「キッドー！」

叫んだコナンの足元に、トランプ銃が刺さる。続いて、間髪居らずに平次の足元にも。

一歩後ずさつた彼らの僅かに出来た隙をキッドは逃さない。いつも簡単に宝石を手中に納め、無駄な動き一つなく闪光弾を一つ地面に打ち付けた。

まばゆい光が辺りを包み、コナン達の目には、真っ白な世界が広がった。思わず、目を細めずには居られない衝撃だ。

「く、くそつ……」

「捕まえられるもんならやつてみな、名探偵諸君！」

にい、と笑った口元からの楽しそうな声に、コナンと平次は顔を顰めた。スピードやトラップでの勝負となれば断然キッドに有利なのだ。

窓が割れる音がコナン達の耳に届き、光が消えた頃には、キッドの姿は何処にも無かつた。

コナンと平次は一瞬だけ顔を見合せた。

「……くつそ、あのフサけたコソ泥がつ！」

「早よ追うで！　あのアホに舐められたままていられへんわ！」

急いで窓の外を見た二人の目に、上空の僅かな白い影が映る。見上げる瞳に、自然と怒気が籠る。

「工藤、お前はそつち頼む！…」

「ああ、分かつた！…」

博物館から出た二人は、スケボーとバイクでその白い影を追った。

どうやら、コナンの道が正しかった様だ。空を飛ぶキッドの白い影が、段々とはっきり大きく、明確な輪郭を描いてゆく。

「あんにゃりー、絶対に追いついてやるー！」

スピードを上げたコナンの姿を、上空から一瞥した彼は、ふわりと近くの木に降りた。コナンが辿り着くまでの時間を頭で計算しながら、奪い取った宝石を月にかざす。

キラ、と光つたのは一瞬。月の光によつて色を変えただけで、赤い石などどこにもありはしない。

「ちつ。また、はずれか」

当たりなんて永遠にこないものかも知れないと、諦めにも似たため息が零れた。

ゆっくりと宝石を持つ手を下ろす彼は、すぐそこまで来ているコナンのスケボーの音もしつかり聞こえていた。

「待てよ、怪盗キッド！」

よつぽど急いでいたのだ。ゼエハア苦しそうな呼吸で、コナンは叫び、顔を上げた。

「んな必死にならねーでも、わざわざオマーの事待つてやつたんだよ。ホラ」

微笑して、宝石をコナンの手元に放る。当然だが、受けとったコナンは怪訝な表情を浮かべた。

必死で追いかけてきたというのにあっさり返されでは、少し苛立たしさを感じるらしい。コナンの顔には、悔しさも混ざる。

「……何の真似だ？」

「どうやら、その宝石はオレが求めていたものでは無かつたようだからな。博物館に返しておいてくれ。今回は引き分けだ、名探偵」

そう呟いたキッドは、強く枝を蹴り、再び夜空に飛び立つ。後に残されたコナンは見送る事しか出来ず、宝石を持ったまま悔しそうにその場に立ち尽くした。

これが、そもそも始まりとなる夜になろうとせ、まだここに閉わった誰もが知らない。

元が短編なので、あまり途中に後書き挟みたくないませんのです。
快斗とかキッドとか、口ナンに平次とかの雑談でもくつつけようか
と思ったのですが……希望あたりする？

なれば、後書きは最終話のみにつけるかと思います～（^ - ^）

*

とりあえず、頑張って加筆修正したので、お楽しみいただけたなら
幸いです^v

2nd・ドッペルゲンガーな出会い

翌日の日曜日、青子と快斗は約束通りトロピカルランドへ遊びに出かけた。ただ、快斗は知らない。実はもう一カップル、そこに歩いているだなんて。

「なあ、工藤。何で女って、こんな買い物に時間かけるんや……？」
「ああ。ホント理解できねえな……」

土産屋の前でしゃがみ込む二人の溜め息が重なる。今更言つまでもない、平次とコナンの二人だ。

キッドを逃がした残念会代わりと言つか、ただ単に遊びに来たかった幼馴染達一人におされた、と言うか。平次とコナンの男性陣の他にも二人、蘭と和葉が土産屋に入っている。

通常ならダブルデートな組み合わせだが、何故か男と女で分かれてしまうのも、やりたい事の差だろうか。いや、仮にここに居るのが新一ならば、綺麗にカップル別に分かれたろう。

「つたく、アイツら何分待たせりや 気が済むんだか」
「なあ、アソコのベンチ行かへん？ ええ加減こないな場所にしゃがんでんの辛いわ」
「オレも」

二人は再びため息をついて近くのベンチに腰掛ける。その前方十メートル程の場所で木に寄りかかっている人物に平次の視線が辿り着いたのは偶然だった。

疲れきった彼の半眼が、驚きに大きく開く。

「ぐ、ぐぐぐぐぐ工藤お――――――？」

大きすぎる声が、半径数百メートルまでこだまする。当然、隣のコナンはびくつと肩を震わせた。

「お、おいつ、何だよ！ そんな大声出すんじゃないよ。だ、誰か聞いてたらどうすんだ！？」

慌てながらも小声で怒ったコナンだが、平次はそれ所ではなく、口をぱくぱくさせながら、木に寄りかかる彼を凝視している。

「おい？」

さすがに不思議に思つてその先を覗き込んだコナンだが、今度は平次の視線がコナンに移る。

「工藤……おっ、お前！ 双子やつたんか！？」

きょとんと眼を丸くして数十秒、平次を眺めたコナンの頭に、その奇妙な言葉がこだまする。

「ふたご……フタゴ……双子！？」

「はあ！？」

その意味に気づいて、よつやく我に返つたコナンの素つ頓狂な声もまた辺りにこだました。

あまりに大仰な驚き方をする平次の様子は、先程まで彼が凝視していた木にいる人物を見て、コナンも初めて理解し納得した。

「ばーる、オレは一人っ子だよ。赤の他人に決まつてんだろ？　つたく、蘭といいお前といい、そんなオレとアイツが似てるかよ？」
「……何で姉ちゃんがここに出てくるんや？」

平次は怪訝な表情でコナンに尋ねる。

それは、コナンが初めてキッドと会った田の事。あの時の彼に相違ない筈だ。

蘭が絡む記憶は、コナンの中で霞む事はない。しかも、それは少しほろ苦い屈辱的な記憶だった。

「蘭も工藤新一とアイツを見間違えた事があつたんだ。オレが女と歩いてたなんて、迷惑な勘違いしやがつて。オレは街ですれ違つて一度見ただけだけど、アイツのせいで蘭に余計な誤解されたから、覚えてんだ……そんな似てるとは思わねえんだけどな。」「……いや、そっくりやで？」

呆れ顔でコナンと彼を見比べる平次に、納得が行かないコナンはむつりとした顔を返した。

「やうやー」

平次は、何か思いついた悪戯っぽい笑みを浮かべ、突然立ち上がり彼の元へ歩く。コナンは、勿論驚いて彼を止めよつとしたが、平次はお構いなしにスタスターと歩いていった。

数メートル位の範囲に近づいて、平次は顔を顰め首を傾げた。木に寄りかかった彼は、ここに来てもまだずつと、あさつての方を向いている。

（こない視線送つとるのに、気付かん奴なんであるんかいな。顔はホンマ工藤に似とるけど、工藤と違て鈍いやつちやな……）

平次は更に歩み寄つた。まるでそ知らぬフリに見える彼だが、何故か緊張した面持ちを浮かべている。それが更に不思議に思わせられる。

「よお、兄ちゃん」

ついに隣まで来た平次が声を掛けると、彼はびくっと肩を震わせて振り向いた。顔を引きつらせ、戸惑いながらようやく口を開く。

「……な、なんだよアンタ。何か用か？」

動搖を隠せない口調で話す彼に、平次は再び小首を傾けた。

「いや、用なんてあらへんけど。オレの知り合いに似とったから声掛けでみたんや。あんたも、土産屋ん中の誰か待つとんのか？」

「……ま、まーな

答えるなり、彼は平次の足元に視線をずらした。それは確かに一瞬だが、不機嫌な顔で上を見上げるコナンと眼が合つて、慌てて視線を平次に戻す。

意味深に一警された事に気づかないコナンではない。その視線には、どこか違和感を感じた。

「ほんなら、あそこのベンチで待つてへんか？ オレりも、土産屋に入つてつた連れに待たされてるんや」

「土産屋に、連れが？」

「そや。あんたも帰つてくるまで一人やと暇やね？」

まだ戸惑う様子が消えない彼と間逆に、人慣れしやすい平次は話し方に全く遠慮がない。

数秒沈黙して考え込んだ彼は、小さく息をついた。

「まあな。……で、あんた達、誰？」

思い出したように付け足した彼は、当然ながら胡散臭いものを見るような目つきをしている。

平次はハツとして、少し苦い笑顔を見せた。

「すまんすまん。そう言や自己紹介がまだやつたな。オレは服部平次や。大阪では名の知れた高校生探偵やで。ほんで、こいつが江戸川コナンや」

「…………どーも」

「コナンは無愛想に軽く頭を下げる。「あらもまた、平次とのテンションは大違ひだ。

彼は、『江戸川コナン』などと言う変な名前を聞いても全く動じなかつた。まるで最初から一人の事を分かつていたかのように、あつさり自分の自己紹介に入る。

「オレは黒羽快斗つてんだ……よろしくな！」

そう名乗つた彼は、先程より自然な振る舞いで、平次達とベンチに向かつて歩き出した。そんな彼の後姿をじつと観察しながら、コナンは首を傾げる。そこに腰掛けるなり、コナンは探るような視線を快斗に送つた。

「ねえ、お兄ちゃんさ、ボクとどつかで会つた事ない？」

「ひ……ひ、人違ひだろ？ ボウズ」

顔色を変えた快斗の声が上ずつている。更に訝しさを感じずには居られない反応だ。当然、隣に座る平次も微妙な空氣に口を挟まずにはいられない。

「何や……一人とも知り合いか？」

「んー、よく覚えてないんだけど」

「ま、まあ、いいじゃねーか。すれ違つか位したかも知れねーけど、オメーも覚えてないしオレも覚えてないってんなら、赤の他人だろ？ なつ？」

強引に会話を終わらせた快斗一人、この有り得ないスリーショットに内心ビクビクしていた。探偵一人の間に座らされてしまったこの密着間は、キッドの時の比ではない。そして、土産屋の中には青子も居るのだ。

（くつそー、青子のせいだ。土産屋なんか寄りやがつて！ 正体ばれたらどうしてくれんだ、アイツ！）

必死でポーカーフェイスを装っていたとしても、バクバクする心臓の音が、隣の二人に聞こえてしまうのではと思うと、気が気ではない。

快斗は、もちろん最初から二人の存在に気付いていた。むしろ、平次に見つかるよりずっと前。「そこら辺で待つてね」と土産屋に入つて行つた青子を見送つたすぐ後、同じように待たされて座る二人を発見した。

動くワケにも行かないが、二人を見つけた時点で、逃げ出したい気持ちで一杯だったのだ。

気づかないわけはない。人一倍気配には敏感だ。けれど、必死で眼を逸らしていただけ。

快斗をじっと見つめ、何か喋っている探偵のうち一人が、立ち上がりて自分の方に向かつってきた時は、心臓が止まるかと思った程だった。

「ほんと、もしかしてデート中やつたん？」

「え！？ あ、いや……ただの幼馴染」

「へー、僕達も似たようなものだよ！」

声をかけられる度に心臓が跳ねる。三人で他愛ない雑談をしながらも、快斗は殆ど右耳から入って左耳から抜けていく状態で話す事になつたのだ。

（あー……落ち着け、オレ。大丈夫……いつも通りでいればいいんだ）

先ほど早まつた鼓動を何とか落ち着かせて、小さなため息をついた。楽しいデートの一日の筈が、最凶の厄日かと思うほど、前途多難な一日になつてしまふとは。

一方、土産屋。

トロピカルランド限定お土産コーナーと書かれたポップの下で、蘭と和葉は相当な時間悩んでいた。その手には、二つの違うホルダー。

「ねえ、どっちがいいと思う?」

「そやなあ……どっちも捨てがたいわ。」

ちなみに、補足しておくと、別に一人は片方しか買うお金がないわけじゃない。むしろ、この日は贅沢するつもりで多めに持つて来ている一人の財布はしつかりつめられている。

ならわざと両方買えばいいのに……と突っ込みたくなるのだが、それは置いておこう。

「あっ、和葉ちゃん! これ。これも可愛いよー!」

その隣にも可愛いお土産があるのを見つけた蘭は、にゅっと手を伸ばす。しかし、そこには蘭のものではない手がかかつた。

「あっー。」

一人の声が重なる。驚いて手を離した一人は、お互に声を上げ、顔を見あわせた。きょとん、としながら一人は数秒呆然とした。

「蘭ちゃん、どないしたん?」

和葉も、視線を一人の顔に移す。そして、その異様な光景に、彼女は突如目を大きくして、一人を指差しながら叫んだ。

「ら、ら……、蘭ちゃんが一人! ! ?」

「えつ?」

「あ~つ。本當だ! 青子に似てる! -」

三人は目を丸くして、お互いの顔を見つめあった。どうやら同じ

年位らしい事がわかると、三人の間に遠慮と詮づものが取り扱われる。

「あの、私毛利蘭！」

「アタシは遠山和葉や」

「蘭ちゃんに、和葉ひやんかー！ 私は中森青子。よひしへね」

初対面だといふのに、三人は一瞬で意氣投合した。ようやく闇つものを決めて、レジの前できやこきやこ騒ぐ。

「へえ～、青子ちゃんのお父ちゃんも警察官やの？」

「え？ ジゃあ和葉ひやんのお父さんも？」

「そや。あたしのお父ちゃんは大阪府警の刑事部長やつてんねん」「私のお父さんも昔は警察官だったんだよ。あつ、今は探偵なんだけどね」

「あーっ！ ジゃあもしかして、蘭ちゃんのお父さんって、あの眠りの小五郎？」

「え、う、うん」

毛利とこう苗字で分かったのだらう。青子は少し興奮気味にそう尋ねたが、蘭は僅かに苦笑した。

今更、仕方ないのかも知れない。でも、『眠りの小五郎』と父につけられた通り名はどうにもグータラオヤジを連想させてしまう。同じく探偵をしている新一は、『平成のシャーロックホームズ』だの『日本警察の救世主』だのといかにもクールで格好のよい通り名がつけられているというのに、この扱いの差は何だろ。

しかも、何がよろしくないって、そのグータラな通り名が相当ぴつたり当て嵌まっているという事か。

蘭はそう考へ、内心で溜め息をついた。

結局、悩んだ末に買つ物も決めて、三人は仲良く店を後にした。

「青子ちゃんは、誰かと一緒になの？」

「うん。快斗って言つてね、幼馴染みなんだけど、そこいつと一緒に来てたんだ」

幼馴染と言いながら、微かに頬を赤らめる青子に、蘭と和葉は自分達を重ね合わせ、途端ににやけた。

「ふーん、快斗君って言つのが、青子ちゃんの力になんだ?」「え?」

「隠してもアカン! 好きなんやろ? 快斗君の事」

「そつ、そんなんじやないよ~っ!」

ムキになつて否定しても、赤い顔まで隠しきれない。

「青子ちゃん、かわいいー」

「冗談や。うん、気持ち分かるでー。」

蘭と和葉は自分達を棚に上げてクスクス笑いながら、口々に言つた。

青子とも仲良くなつた所で、和葉は何やらピンと来た顔で蘭に耳打ちする。それを聞いた蘭の顔も輝いた。

「青子ちゃん、アタシ達にも連れがあるんよ。よかつたら合流せえ

へん？」

「勿論、青子ちゃんが快斗君と二人きりがいいなら邪魔しないけど……折角仲良くなつたんだし」

「えつ、ほんと？　いいの～？」

青子も、嬉しそうに身を乗り出す。

「ええよ。平次が嫌がつても、アタシが（無理矢理）説得するし、

快斗君次第やな。」

「大丈夫だよ、快斗は青子が言つ事聞かせるから。」

女子高生三人集まるで、そこには和気藹々とした談笑が生まれた。店から出た三人は、キヨロキヨロ辺りを見回し、ベンチでくつろいでいる彼らを見つけた。三人は同時に叫ぶ。

「平次！」

「コナン君！」

「快斗！～！」

やつと来たか、と溜め息をつきながら、男三人衆は振り向いた。その一連の動作はまさに、息ぴったりだ。

顔を合わせた六人の中、やはり平次と和葉はお約束の声を張り上げた。

「ね、姉ちゃんが一人あるつ！～？」

「く、工藤君！～？　な、なんでなん？」

重なつた声は、先程と全く同じ反応だ。六人はどつと吹き出した。一通り笑い終わつた後、快斗は片手で腹を抱えながら、女の子集団に言った。

「なんだ、青子達も一緒に居たのか。あつ、オレは黒羽快斗。二人ともよろしくな」

につ、と笑つて彼は後ろ頭を搔いた。基本的に彼は誰にでも親しげだ。そんなにこやかな雰囲気の自己紹介だから、蘭も和葉も壁を作ることなく微笑んだ。

「あたし、遠山和葉や。よろしく」

「私は毛利蘭。よろしくね、黒羽君」

青子はそんな三人の様子を見て、思い出したように慌てて言った。

「あつ、えつと…服部君と、コナン君だよね。中森青子つていいま
す。よろしくね」

「よろしく、青子姉ちゃん！」

「よ、よろしくな」

平次だけ一人、混乱して信じられないと言つ表情が消えずに、彼女らを見つめていた。未だ平次には、その光景が驚愕以外の何者でもない。

(ド、ドッペルゲンガーや……信じられへん……！)

六人は、男三人と女三人に分かれた。これもまた、自然な分かれ方。

この事が快斗の最大の不幸になるとま、この時の彼等は知る由もない。

2nd・ドッペルゲンガーな出会い（後書き）

THE ふりいとーく

は？ 何やで、普通にこん位似てる奴あるやろ、て？ 世ん中には似どる奴が三人居る？

アホか、アンタら！ 似てるつちゅーレベルやないで、ホラ、言うやろドッペルゲンガート。

つまりアレや、どう見たかて怪奇現象や！ あり得へん。

工藤はアホやから、どんだけ似てるか言われても自分じや判らへんねんな。あー、まだ衝撃が抜けへんで？ どないなつとんねん。

つちゅーワケで、オレはナーワの高校生探偵、服部平次や！ 作者の……朧月のアホがな、どうしても後書きに何も書かへんのは読んでくれどる皆に失礼やで、リクエストされてもおらへんのに、こない奇妙なトークコーナー設けてしもたんや。

オレの関西弁書くんも、実は相当四苦八苦しとるらしいんや。もう、こら関西弁やのーて「服部平次」の口調やて自分に言い聞かせて書いてるつちゅーハヤド。

少しでも、違和感感じさせてへんとええけどなあ。

あ。もう、スルーで全然構へんや！ ビーセロクなもんにはなんやうーしな。

せやけどな、この黒羽つちゅー兄ちゃん、けつたいな奴やで？ 挙動不審つちゅーか……まるで、ホラ、アレや！ 追い詰められとる犯人みたいやんけ。

工藤が何や見覚えあるーみたいな事言つてたし、事件がらみやない

かて思つんやけどな。

けど、あの工藤にそつくりな顔や。絶対キザな奴やて踏んでたんやけど……その点普通やなあ。

やつぱり、キング・オブ・キザオは工藤しかおらへんか？
せや！ キザ言つたらもう一人居つたで！ キッドや。あのふざけたコソ泥や！

キ：「お呼びですか？ 服部探偵？」

「キッド……」ここで会つたが千年目や！ あの博物館の借り返したるで……！」

キ：「威勢だけは認めでやつてもいいはだ、生憎構つているだけの時間がないんでね」

「何やとお！？ オレの事舐めとつたらアカンで！ 今この場で捕まえて身ぐるみ剥いだるわ！」

キ：「それには、答えるわけにはいかねーな。今は大事な用足し中でね」

何が用足し中や！ どうせ口クな用やないやん。

例えば、この遊園地トロベカドリンドのアトラクションにつこじるオモチャの宝石狙いとか……客の指輪狙いとか、そんなケチいもんや。折角の休日を何やと思てんねん、このアホ！

青：「あーーー。キッド。服部君、何やつてるのー。捕まえて！」

！」

キ：「おや……お嬢さん。デート中にそんなおでんばは好ましくあつませんよ？」

青：「違うーー。青子は今日ただの幼馴染の快斗と……アレ、そ

「言えれば快斗は～？」

キ：「…………と、と、トイレ、だと思こますか？ お嬢さん」

青：「え～っ？ もう、いつも肝心の時にいらないんだからー。」

「ん？ 黒羽が居らへん？ 何でや……トイレンんで、一判断するやろ、フシー。」

まさか、コイツ…………！？ は、アホな。あの鈍い兄ちゃんがキツドのわかるかい。

ハハハ、アホらし。工藤＝「ナン方程式よりありえへんて。あん時も吃驚やつたけどなー。おわか工藤があんな小つさこ、園児みたいなナリしとるやなんじ。」

口：「おーい、服部に。ビーブドモいにカジ、何かオメーをつけからオレの悪口言つてねーか？」

「は！？ あ、気のせいいやー……せやから、何も言わずにその時計しまえ？ な？」

口：「園児だのキザ男だの、オマーの心の声が聞こえた気がすんだけどなあ？」

「ぐ、工藤、心の声なんて証拠もあらへんやんけ。それより、ホラ……青子ちゃんが見てんで？」

口：「平次兄ちゃん、ボクの悪口言つたら、あとでバチが当たると思つよ ねつ、青子姉ちゃんもボクの味方してくれるでしょ？」

青：「う、うん。だから口ナン君ー、コイツ、キッドを捕まえるのに協力してつ（^__^）」

口：「いーよー、青子姉ちゃん、一緒にキッドをメッタ刺しひょひねー（^__^）」

青：「うん……め、メッタ刺し？（^__^；」

工藤、チヨー待て。こないな人の多い所で、そのけつたいな靴バ
チバチ言わせてどないする氣いや……

それは、キッド狙いなんか？ それとも、足が滑つた言ひて最終的
にはオレ狙いなんか？？ ヘルプや、工藤ハーン！

キ：「……じゃあ、そろそろ私はこの辺で失礼しましょ‘つか？」

口：「！？」

青：「……」

お、キッド逃げよつた。メツチャ早い逃げ足やなアイツ。最後の
方、完全にポーカーフェイス崩れとつたで。
当然や。今回ばかりはキッドに同情すんでも。
オレは麻酔銃くろた事あるだけやけど、工藤が持つとるアレは凶器
や！ 絶対フェアやないで。傷害罪や！
ガキのクセに、平氣で極悪非道な事しよるんや。お～「ワ～・

口：「ねえ、平次兄ちゃん、今また何か言つた？（ニヒホヘフハ）

「は？ な、何も言ひてへんて！」

口：「なあ服部い、覚えてるよ？（ぼそつ……）」

「ぐ、工藤！ 蘭姉ちゃんも見とるで？」

口：「蘭姉ちゃんつ、次何に乗るつか？」

蘭：「うーん、あつ、そつ言えれば新しいアトラクションが出来た
つて知つてる？」

口：「うん！ あ、快斗兄ちゃんも帰つて來たみたいだよ」

快：「悪い悪い、待たせたかー？」

青：「快斗？ サツキまでキッドが来てたんだよ？」

快：「へ？ こんな遊園地にキッドがか？ アホ子、そりやオメ

ーの見間違いだ」

青：「何よー、バ快斗！」

あー、アカン。黒羽と青子ちゃん喧嘩始めてしもたわ。それにしても……何や、色んなもん投げて……のわつ。
ガヤーッツツツ……！

青：「あ、『メン服部君』

快：「悪い悪い、このアホ子のせいだけど、当たらなかつたか？」

「……つー危ないんじや、ボケ！」

飛んできたんは、清掃用のチリトリや、プラスチックやのうで、
あの痛そうな。

アカン、收拾つかなくなつてきとるやんけ、乱闘や。オレにこれ以上どうせえ言うんじや。作者のアホ。

朧：「はーい、どうもーつゝおバカなこのふり」とーくにお付き合
いあつがとうございましたーつー！

よくぞ……よくぞ耐えてくれた最後まで（感涙）実は、私がいつも
後書きにかける時間が二十分以上（似てる事書いてるよう見えても
実は苦労してんだよう！）

……そして、今回かけた時間がやはり同じく一十分。トークを誰に

するか悩んだ十分と、実際書き始めてから十分。

実はこういうノリの方が、後書き普通に書くより得意だつたりします（笑）会話がとことん苦手な朧月です！

でも、結局おバカです。最後までおバカです テへ、「ゴメンよ（^_^）だから、後書きにクレームだけはご勘弁><

と言つわけで！ まあこんな下らん時間も、もしかしたら本編の幕間にでも存在したかもしけないみたいなノリで考えていただけると。

アタッ……ア、ウ！？ ブギヤ！ イタタタタタ！（涙）何すんのさーっ、どつかからかアルミ缶＆スチール缶飛んで来たよ！？ ウギヤー！？」

安心せえ、皆。作者のアホ女はもうノックアウトされてんじて。とつあえず、第一話も読んでくれてありがとおな！ またこれからも、オレ達の活躍暖かい目で見守つとつてくれや～！ 次回もよろし頼んまつせ

朧：「そして私も蘇るぅ」

「一生寝とれ、このドアホ作者！」

（ボカツ）

3rd・おさかな逃亡記、そして導かれてゆく

「快斗おー、ちょっと、どこに行く気よー。」

「うひせー、これ嫌味でやつてるだろ。海底探検おさかなロースターハンなんだよー。」

必死に逃げようとする快斗の衣服を、青子はガツチリと掴み、ずるずる引きずる。

「もー、ジジが嫌いなの、お魚ー。」

「全部、全部だよー！　ジジなんてポイント言えるかー！」

『やー、やーと、何やうといつもなく下らない話題で列を出たり戻つたりしている一人を、コナンはじっと見つめていた。顎に手を当て、真剣な眼差しで常に視線は快斗へ向いている。

どこかで会つた事がある。街中ですれ違つたレベルではなく、話をした事がある。彼が否定しようと、自分の記憶が薄れていようと、それは恐らく確かな事に相違ない。

雰囲氣も、声も覚えはあるのにどうしてもそれが思い出せない。そもそも、一度会つた人の事は、あまり忘れる事などなかつた筈だ。ましてや、そんなに遠い過去に出会つた記憶でもない。

暫くの間、目を細め、思索にふけつていたコナンの頭上から声が降つた。

「何や、さつきから何考え込んでんねん？」

見上げたコナンの瞳に、彼の怪訝な表情が映る。そして、同時に

青子と漫才喧嘩をしていた筈の快斗が、急に大人しくなり、ひりりと口ナン達に視線を移した。そんな快斗を一警した口ナンは、すぐ平次に視線を戻し、そして小声で囁いた。

「あの黒羽快斗って奴だけど……オレ、絶対どつかであつてる筈なんだ」

すると、平次には呆れ顔が浮かんだ。

「……せやからな、お前に似とるて言つてるやん。それで錯覚してるんぢやうか？」

「いや、そんなんぢやなくて。最近何度か会つてる筈なんだよ。思い出せねえけど」

「それは、アレや。姉ちゃんに誤解された時やないか？　お前言つてたやんけ。街で一度すれ違たて」

「いや、そのときの事ぢやなくてよ……どつかで……」

咳きながらも、黙り込んだ口ナンの口からは、それきり言葉は返らなかつた。列が進むたび、無意識に前の人について脚を動かす。そんな感じの動きしかしない彼は、明らかに全神経を自分の思考に集中させている。

平次は当然首を傾げた。数秒待つてみても返答がない事を確認するど、仕方なしにも、快斗と話し始めた。

「お前、けつたいなやつぢやなー。なんでそない魚が嫌やねん？」

「だーかーら、理由聞かれても困るんだつて。生理的に受け付けねーもあるだろ？　それが、オレにはあの物体×なんだよ」「食うには平氣なんか？」

「ぐ、食うー？　やめろ、殺す氣か！」

「いや、そんなワケやあらへんけど、そないに嫌なおさかなコース

ター、次オレらの番やで？

「へ？ ……はあつ？」

自分達の前に並んでいたカップルの列が、ついに誘導されたのを見送りながら、白け顔で宣告した。言われて初めて最前列に居る事に気づいた快斗の顔は、ヤーッと青ざめる。

「それでは、次のお客様」

声をかけられた快斗の顔が、思い切り引きつった。その隣で、満面の笑みを浮かべる青子の姿など、全く田には入っていない。進むすぐその先に見えるのは、行く手に待ち受ける水槽。

「魚わ―――つ……」

奇声を発して逃げ出そうとした快斗の手を、青子はすかさず捕まえた。

「ダメだよ快斗、ここまで来たんだから。さ、弱点を克服するつもりで。ね？」

「あ、青子……青子ちゃん、ちょっと離してくれねーか？ オレ、その……トイレが漏れそうで」

「あれ。トイレ、せつき行つてきたんだしょ？」

「またもよおしたんだよ！ ……じ、じゃあな……」

焦っている様子の顔に一行の視界が集まるのと同時に、いつの間に青子の手から逃れていた快斗は、凄いスピードで外へ逃げ出していった。

「じゃあな、アホ子」！ オメーラは楽しんで来いよー！」

「かつ、快斗！？」

「い、行つてしまたね……黒羽君」

「そんなに、お魚が嫌いだつたんだ……」

小さくなつて、ついに後列の影に隠れた快斗に、五人だけでなく、係員や他の客も啞然とその様子を眺めていた。

数秒の間を置いて、はつとした係員に慌てて席に誘導されるまで

は。

「ぶはつ、アハハハハハハ！ 傑作や、お前おもうすぎやう…！」

「コースターから降りた出口にちよん、と居心地悪そうに座つてい
た快斗を見るなり、平次は耐え切れず噴出した。それが更に他の人
の視線を集め、快斗は赤い顔で平次をにらみつけた。

「うつせーな、魚は見るもんでも食うもんでもねーんだよ。この世
から居なくなればいいもんだ！」

「いやいや、ええキャラしてて思うで！ 天然でアレやられてし
もたら、関西人の立場ないやんけ！」

よほど快斗の態度がドツボに入つたらしく、平次は暫く腹を抱え
る手を下ろせなかつた。何より、この彼がそんな行動をとろうとは、
全く予想がつかなかつたのだ。

平次視点での印象からすると、最初、快斗は無愛想でびくついて
いる変な奴だつた。しかし、話したり接する度、人懐っこく、明る
い性格がよく伝わる。認め辛いことではあつたものの、意外に頭も

かなりきれる事が短い時間で判つた。

(まあ、その辺はアレや。工藤と同じ顔でオツムがアホやつたら違和感ありまくりやしな)

失礼極まりない考えを浮かべつつも、未だ俯いて何も話さうとしたコナンを放置して、平次は快斗と言葉を交わした。

元々、コナンより碎けた性格の快斗と、少し碎けすぎている平次とでは話のスピードも乗るらしく、内容はぐだらない話だが、無駄に「つむぎ」と「コンビ」が誕生した。

「あーっ！ もしかして、青子ちゃんのお父さんって、捜査一課の中森警部？」

「え？ 阪ちゃん、お父さんの事知ってるの？」

蘭は、歩きながら突然叫んだ。出合つて、一時間一時間一緒に居ても気づかなかつた微かな違和感がようやく確かなものになつたのだ。

驚いて反応した青子を見て、やっぱりと確信した笑顔が浮かぶ。

「一、二回だけど、会つた事あるんだよ。お父さんの仕事についていたときに」

「へへ、じゃあ、蘭ちゃんのお父さんもキッドに興味あるの？ 心強いね！ 青子のお父さんはねえ、キッド専門なんだよ。」

毛利小五郎の名前が味方にあると認識した青子は、素直に喜びの

声をあげた。

ただ、ずっと俯いていた「ナンは」キッドの単語に反応して顔をあげ、その様子に気づいた快斗もピクリと一瞬険しい顔を浮かべた。

そんな微妙な視線に気づく事なく、青子の思考はその存在への怒りに向かっていく。

「蘭ちゃんは……キッドって好きなの？」

「え？ ん、と……判らないよ。でも、そんなに悪い人じやないと思うけど」

「そんな事ないよー！」

困った質問を受けて、答え辛そうに言つた蘭の言葉を、青子は怒鳴るように静止した。

大声に会話に加わつてなかつた筈のその他四名も驚いて青子に視線を送つた。

「青子は、キッドなんか許せない！ 皆好きだつて言つたが、あんなのただの盗みを楽しんでる泥棒じやない！ 宝石盗んだと思つたら返して、いつもそんなのばっかり。窃盗をシヨーか何かと勘違いしてるの……」

「あ、青子ちゃん……」

「青子は、キッドなんか……大つ嫌いなんだから！ 世界中のキッドファンを敵に回してもいいよー 泥棒だもん、犯罪者だもん！」

ふざけあつて喧嘩している時の剣幕とも違つ、本気で憎しみ交じりの怒鳴り口調に、快斗の顔が悲しく曇つた。

「……そうだった、そのバ快斗は、いつもキッドの味方だけどねー！」

膨れた顔でそっぽを向く青子に、今回ばかりは返す言葉が見つからないらしく、快斗は小さく溜め息をついた。

「え、ええんか？ フォローせんと！」

「どうフォローしろってんだよ。オレにはこの件で、アイツに言ってやれる事なんかねーんだ」

気遣わしげに平次が快斗の耳元で囁いたが、悲しい台詞が返った。そして、同時に先程まで考え込んでいた快斗への違和感が、コナンの中で一つに繋がった。何処で会っていたのか、なんて何よりも簡単な問い合わせた。つい先日も、自分は彼と会ったばかりだ。

そう。宿命の、ライバルとして。

3rd・おさかな逃亡記、そして導かれてゆく（後書き）

こんばんはー（^ - ^ * ）今回もお読みいただきまして有難う御座います！ というわけで、第三話はお魚中心でお送りしました（笑）

今回は、改訂というよりオリジナルに付け加えたシーンが大半を占めます。平次と快斗には仲良くなつてもらおう。それが、今回の話の目的です♪

そして、それがまたラストへも活きて繋がつてくれるのです。（と、信じているのです）

にしても、ちゃっかり後書きつけてる私（^ ^ - やつぱん、一話一話読んでくれてありがとう！の挨拶したいよ^ ^

反応くれてる方には直接ありがとうを言えて、やつじやない方にとも、伝えたいもの。ありがとうございます。

とこうわけで、次話もまたよろしくお願いいたします～＼＼＼＼＼

4th・発覚した全て

「コナンの頭に浮かんだ考えは、今までを思い返す程確信されてゆく。

そもそも、キッドは何処か憎めない所もあって、絶対に自分の手で捕まえてやると誓つた相手だつた。キッドになつた経緯はよくは知らないが、今までの快斗を思うと、何となく憎めない理由もわかる気がする。

月明かりに蒼く照らされ、いつだつて強気に微笑んでいるあの大胆不敵な怪盗が今自分の目の前に居る、という事実は、少なからずコナンの心を高揚させた。

普通の高校生で、壁を作らない奴。黒羽快斗としている今なら簡単に捕まえられる。けれど、コナンは自分の頭に浮かんだ考えを一蹴した。

「おい、服部……」

青子騒動で快斗と少し離れた平次のすそを軽く掴み、周りに聞こえない小さな声で呟いた。引っ張られるまましゃがみ込んだ平次の耳に、コナンは口を寄せた。

「最初に言つけど、変な声あげんじゃねーぞ？」
「ああ、なんや?」

最初に釘を刺した。彼が自分と同程度にボリュームを落として答えたのを確認するなり、コナンは小さな声でもわかりやすくゆっくり囁く。

「今、彼女の一言で思い出したよ、黒羽の事。あいつは……キッドだ」

キッドといつ単語に、意図的にアクセントを置く。それを聞いた平次の顔にも驚きの表情が浮かんだ。

「……ちょ、待て。工藤……お前、何言うてんねん！」

「信じられねー気持ちも判るけど、間違いねえよ。オメーより、オレの方が何度も奴と面識があるんだ。あのコソ泥の雰囲気はよく知ってる……黒羽は、あの怪盗キッドなんだよ」

「ぐ、工藤……」

言い切ってから、コナンの胸を辛い気持ちが襲った。悔しげに唇を噛み、俯く姿に、平次もそれが冗談の類でなく確信ある事と悟つた。

辛い表情の意味が、平次には少し読み取れた。快斗がもし、怪盗キッドとするならば、青子と快斗の様子を見れば、それはまるでコナン自身と蘭によく似ている。

ずっと、大切な彼女に正体を隠し続けている自分。そして、それによつて傷つく彼女を傍で見ながら、それを明かせない、何も出来ない無力な自分……

何か暫く押し黙り考え込んでいたコナンは、再び口を開いた。

「服部、それでな……確信しちまつておかしな話かも知れねーけど、頼むから今は……彼女が側に居る今は、この事は口に出さないでくれるか？ 今だけは、そつとしておいてやりたいんだ。」

「……そないな事、お前に言われんでも分かつとるわ」

痛いほどその気持ちが伝わるから、平次も何も聞かずにつき承する。コナンはほっとした顔で微笑んだ。

勿論、二人とも絶対に破らないつもりの約束だ。

彼女にとつてキッドは敵。けれど、黒羽快斗は恐らく彼女の何よりも大切な存在だ。真実を知る事があれば、間違いなく彼女は傷つく事になる。

彼女が近くにいる時は、何があつても知らないフリをしている事に決めたのだ。

そう、一人とも、全くそのつもりなどなかつたというのに……。

それから、コナンからも平次からもその話題は出なかつた。コナンは最初のむつり考え込んだ様子でもなく、子供の演技全開で、平次と共に皆との時間を楽しんだ。

あちこち色々なアトラクションに乗つて、時に叫ぶ場面や笑う場面を過ごしながら、沢山遊んだ。

快斗と青子の二人も、まるでずっと仲がよかつた友達のように自然に底に馴染んでいた。

それは、普通の高校生の友人同士の集まりのように。

「……ねえ、それにしても喉渴かない？」

その何気ない咳きが、そもそもその事の発端となる事など、誰も知つた由もない。

「んー、そやね。なんか飲み物買つて来よか。」「じゃあ、一緒に行こ。快斗たちはここで待つで。」

女三人衆は、揃つてジュースを買いに出かけた。つまりその場にはコナン、平次、快斗の三人だけ残されたのだ。
自動販売機は離れた所にあるから、彼女達が帰つてくるまで時間がかかるだろう。それは、まさしく絶好のチャンスだ。

完全に彼女達の姿が見えなくなつたところで、コナンが話を切り出した。

「なあ、どうして盗みなんかやつてんだ？ 怪盗キッド、さん……？」

下から声をかけられた快斗は、一瞬驚いた顔でコナンを見下ろした。そこには、幼い探偵の顔をしたコナンが居る。
すぐに、快斗はポーカーフェイスにクールな表情を浮かべ、少し低い声で応えた。

「……何の話だ？ オレは黒羽快斗だつづてんだろ？ ただの高校生。キッドとは何の関係もねーよ」

何をバカな話をとでも言いたげに、呆れた笑いと溜め息が漏れた。
そんな態度に、コナンの表情は先程より幾分鋭く険しく変わる。

「隠すなよ。もう、オレ達は全部分かつてんだからよ。」

「全部つて、何が？」

「オメーが怪盗キッドだつて事。多分……そうだな、二人目だ。父さんから聞いた事があるキッドとは少し様子が違うみてーだし、ど

「こう経緯で後を継いだかは知らねーけどな」

「せや。オレも、このボウズから聞いて色々考えたんやけど、アンタとキッドの雰囲気、重なる所がめっちゃあるみたいや」

平次もコナンに同意し、頷いた。すると快斗は口を細めた。

「……オメーラ、勝手な事言つてくれるけど、何か証拠はあんのか？」

「別に……けび、こいつはもうお前の名前も、学校も知つてんだ。調べればすぐにわかる事だろ。彼女が離れるまで待つてやつたんだから、白状しろよ」

同級生の無駄に気取った名探偵とは、また全く違つ強引で強気な追い詰め方だ。有無を言わせないその慧眼に捉えられたら、幾ら言い訳しても無駄。

科学にも何にも頼らず、真っ向から確信した事實を突きつけたコナンに、隠し通すのはもう不可能と観念した。一つ、ため息をついた快斗の顔に、キッド特有の不敵な笑みが浮かぶ。

「やつぱり、気付いてたんだな。さつき青子が言つた言葉の反応見ればオレも薄々気づかれたと思ってたけどな」

名探偵には叶わないね、とキッドらしく口調で言つた快斗を、コナンも平次もぽかんと見つめた。

「……白状させるつもりではあつたけど、やけにあつせり認めたじやねえか」

「今ここで言い逃れたとしても、名探偵の確信は変わねえんだろ？ オレはマジシャンだ。トリックのタネを見破られておいて、無様に証拠とかにすがり付くのはモラルに反するんでね

「中々潔いじゃねーか」

「ああ、それに例え分かつた所で、今ここで捕まえるつもりはねえんだろ？ オレを捕まえるなら、怪盗キッドとしてのオレを推理で追いかけてつて、そういう奴だろ……お前らは」

そう話す快斗の顔には、絶対の自信があった。彼はコナンや平次をそういう意味で信じて認めている。

「……確かに今“黒羽快斗”を捕まえたとしても、嬉しくもなんともねえよ。お前を捕まえるのは、お前のトリックを推理で破つた時だけ決めてんだ。それに、彼女を悲しませたくなかつたんだよ。オレもお前と似たよつな身分だからな。」

隠し続けるその辛さ。涙を流すたび、訴えて来る度胸に痛みが響く。それは、恐らくコナンが考える、快斗との唯一で絶対の共通点なのだから。

二人の探偵と、一人の怪盗はその場で暫く対峙した。コナンも平次も、目の前で不敵な笑みを浮かべる彼の変化に驚いていた。

それは、高校生黒羽快斗ではない。外見だけ高校生だが、確かにそれは盗みとマジックの天才、怪盗キッドなのだ。

「あつー！」

蘭や和葉と自販機に向かっていた青子は、突然声を上げた。

「何や？」

「どうしたの？ 青子ちゃん」

尋ねると、彼女は少し慌てた様子で、一人に言つ。

「実はホラ、快斗の携帯、間違つて持つてきちゃつた」

そう言つて、彼女はバックからその携帯電話を取り出した。もつててくれと言われて預かつたものをついそのままにしてしまつていたのだ。

その小窓を見て、青子は困った顔を浮かべた。

「蘭ちゃんも和葉ちゃんも、ごめんね、先に行つてくれる？ 何か四回も着信入つてるみたいだし、急ぎの用事だとまずいから、ちよつと快斗に渡してくるよ」

「あ、じゃあ私達も一緒に行くみ」

「そうや。三人で行」

顔の前で手を合わせ、必死に謝る様子に、蘭と和葉は目を合わせて頷きあつた。しかし、青子は自分のドジに付き合わせる事が申し訳なかつたのだ。笑つて首を振る。

「大丈夫。すぐ追いつくから。一人は先に行つてて」

青子は明るくそう伝えると、駆け足で元居たそこに戻つていつた。何も知らずに、その携帯を渡すだけのために。

「あ、居た居た……」

視線の先に快斗の姿を発見した彼女は、何も考えずに近づいた。

そこで、彼らがしている会話など、全く予想が出来る筈などなかつたのだ。

4th・発覚した全て（後書き）

いつも、こんばんは～（^ - ^ * ）

今回もまたお読みいただけて幸せですvv

コナンの気持ち、快斗の気持ち、しつかり伝わったのであればよい
のですが……vv

次回、最終話……になるか、それともまた違うものになるかどうか
は、私が加筆エピソードを加えるかどうかによります。

来週、まだ時間ありますね～～土曜日最終回と日曜日最終回、ぜひ
お楽しみください！

とこりわけで、最後までお楽しみいただければ幸せです～
それでは、今回もまた有難う御座いました！

5th・全てを知った先にあるもの。

「……だろ?」

突然耳に届いた会話の、あまりに慣れない雰囲気に、青子は立ち止まつた。そつと木陰から覗き見ると、何やら深刻な話をしているのが判る。

三人とも、驚く程の美貌ぶりだつた。大人っぽく、クールで強気な視線を快斗に向けるコナン。そして、平次もまた同じく快斗と向き合つ表情は真剣そのものだ。いや、一番驚いたのは、快斗の雰囲気だ。いつもとは全く違つ顔でそこに立つている。

「か、いと?」

自分にすら上手く聞こえないほゞ小さな声を出して、気づかれないようになぞりと歩み寄つた。その緊迫した雰囲気は、何処か声も掛け辛い。

「そりだよ、オレが……怪盗キッドだよ」

突然はつきりと耳を通つた声に、青子は呆然とした。確かにソレは快斗の声で、快斗の口が動くのも見ていた。けれど、信じたくはない。

もしも……それが自分の聞き間違いであればどんなにいいかと願つた彼女だが、やはりそんな類のものではないと確信してしまつ。そしてそれが、[冗談でなく真面目な会話だ]ということも。

「快斗が……キッド?」

今この世界に存在する何を信じれば妥当か、彼女には判らなかつた。考える力が皆無になつた彼女の白い頭は、ただその場で立ち尽くすしかない。

「きやつー。」

タイミングよく鳴り響いた携帯電話の着信音に驚いて上がつた青子の叫びが、三人を同時に振り向かせた。弾みで青子の手から滑り落ちた電話から、そのメロディーだけが空しく鳴り響く。

「青子……聞いてたのか？」

呆然と呟くしかない快斗以外の一人も、目の前の光景が信じられずにいた。数秒だけ、青子は唇をかみ締め無言で俯いた。ただ、尚も鳴る携帯電話を指差して、たつた一言呟く。

「…………携帯、とれば？ 早く」

俯いている為、男達に彼女の表情を読み取る術はない。

ただ、快斗は一人でぐるぐる考えていた。全てを聞いていたのか、泣いているんじゃないのか、そんな思考で頭をパンクさせそうになりながら、快斗は、落ちていてる携帯をそつと手に取つた。

「もしもし？ あ、ジイちゃんか……ああ、…………分かった。…………じゃあ、な

快斗は電話を切ると、緊張した面持ちで青子に向き合つた。恐る恐る、未だに俯いている彼女に声をかける。

「あ、青子、どうして……ここに？」

「快斗に携帯渡そうと思つてね。戻つてからでもよかつたんだけど、着信四件も入つてて、急ぎの用事だといけないな。つて、思つたから……」

俯いたままぽつりぽつりと話す青子の声は、終始震えていた。張り詰めた表情の快斗に救済舟も出す手段が浮かばず、コナンも平次も、黙つて心配そうに一人を見守つた。

沈黙や気まずさが辺りの空気を覆い包む。

先に、重い沈黙を破つたのは、青子の絞り出したような声だった。

「やつ、なの？ 快斗が、キッドなの…………？」

顔を上げた青子の瞳に、涙が薄つすら滲んでいた。問い詰めるよう瞬きも忘れた彼女から、彼自身も田を離せない。

どうしようもない問題だ。告白したのは自分。どう誤魔化せと言つただろう。

「「」「」めんな、青子。……今まで、ずっと隠して騙して、本当に……」

こいつもの自分のような、上手い言葉が紡げない。快斗は、青子が無言でただじつと自分を見つめれば見つめるほど、言葉を失つた。

こいつが打ち明けるつもりだった。もしも全てが終わつたら、自分の口から何もかもを。許してもうえなくとも、ただひたすら謝罪して。

彼女の苦しい顔は、自分がついた嘘の大きさだ。それが判るからこそ、快斗自身「「」めん」なんて言葉で済まされない事と理解して。

いた。けれど、「コレがこの時浮かんだ精一杯の言葉で、それしか思いつかなかつた自分が快斗は憎くて仕方がなく感じていた。

どんな仕打ちも受け止める義務がある。大好きな彼女がそれで少しでも心が晴れるなら、罵られても、思い切り叩かれても、たとえ嫌われて一生絶交されたとしても。

様々な最悪の事態への覚悟は彼の中で固まつっていたから、青子が次に口にした言葉は、とても驚くものだった。

「違うよ……」

「へ？」

「違うでしょ？ 青子に謝るのは絶対違うと思つ。本当に悪いと思つてるなら、お父さんに謝つて。青子は何も事情知らないけど、ワケがあるからしてたんだよね？ お父さん、それ全部話して……ちやんと自首して」

内容自体は厳しいけれど、口調は子供を諭すような、柔らかで優しさの籠る物だ。そして、それはとても真っ当な言葉だった。

青子は目に浮かべていた涙を拭い、まっすぐに快斗を見つめて切なく微笑んだ。

「もしもね、それで快斗と少し離れ離れになつたとしても。青子はいつでも快斗の事待つてられるんだよ。蘭ちゃんに聞いた話の、工藤君の事みたいにね」

その言葉と彼女の雰囲気から感じるのは、愛情と強い意志。

全く予想外だった彼女の態度に、快斗はただ目を丸くするしかなり。

「ここの話したら、オメーもつと驚いて……泣かせると思つてたんだ
ぜ？ なのに……」

青子の顔には、柔らかな微笑が浮かぶ。

「快斗は、泣いて責めて欲しいとか思つてた？ ……そりや、ショ
ックだよ。青子はキッドを追つてる刑事の娘だし、知るなら快斗か
ら直接言つて欲しかつたから。でも……でもね、本当は知つてたん
だ。信じてたけど、薄々だけど、何度もそうじやないかつて思つた」

「……オメー」

「だつて、ちつちやい頃からずつと一緒に居るんだよ～？ 快斗の
事なんて、判つちゃうんだから」

一瞬、表情を曇らせた青子の顔に、再び緩やかな表情を見せた。

「青子はね、快斗が盗みを楽しんでは思わないよ。だから、本
当は心に隠した深い事情があるの。きっと、ここの事やりたくない
つて思つてる…… そうだよね？」 快斗

風になびいた髪を、彼女はそっとおさえた。悲しくても、それを
受け入れる強さ。

快斗は、驚きながらもただじつと、ポーカーフェイスを崩す事な
く彼女と見詰め合つた。

青子の姿と蘭が重なつて、コナンにも切ない苦笑が浮かぶ。

「……青子……」

ふつと抱きしめたい欲求にからながりも、快斗はぐつと堪え、
出した手を再び下ろす。

「だつて……だつてね、青子は“快斗”を苦しめている“キッド”の事は本当に大つ嫌いだけど、でもどつしたつて……“快斗”的事は大好きだから…」

それが告白になつてゐる事に気づいていないのは、青子のみ。純粋な意味での大好きな筈が、快斗の頬を染め言葉を奪つには充分だつた。

「オレも、青子の事は一応……す、す、すすすすす……
「何よー？」

見守るコナンも平次も、何やら先程とは違つ方向にいきつたある話の行く末に、ドキドキ鼓動が早くなるのを感じていた。

「けつ、んな事言えるかよ
「はあつ？ 何それ～つ」

不満げな反応を返した青子に、今度は真剣な顔を作つた。

「……でもな、オマーの言葉は出来るだけ叶えてやりて一つて思うんだよ。それは本當だけどよ。でも悪いけどまだキッドを辞めるわけにはいかねーんだ」

「どういう事？」

「オレは、まだキッドになつた田的を果たせてねーんだ。親父を殺した奴等の野望を潰すまでは……辞めるワケにいかねーんだよ。ああ、青子がおじさんに言つなら話は別だけどな」

切なく笑う快斗の顔を、青子は驚きを隠せず見つめた。そして、思いも寄らぬ事件の存在を聞いた探偵一人も、勿論真剣な鋭い顔つきに変化した。

青子には、全く予想も出来なかつた事実だ。

「……じ、じやあ、快斗のお父さんつて……」

「ああ。親父は、殺されたんだよ。……事故を、裝つてな。オレは最初、親父を殺した奴等を突き止めるためにキッドになつたけど、あいつ等の狙いがパンダラつつい石だって判つたから、それを見つけてぶつ壊してやろうと思つてんだ。奴等の野望を碎いてやるのが今、のキッドの存在理由だよ。だから全てを終わらせるまでは、オレは、自分からキッドを辞めるわけにはいかねーんだよ」

「……そいつ等の見当はまつてゐるんか?」

今まで黙つていた平次は、ついに口を挟む。殺人事件、しかも何やら長いこと解決していない事件といつ。聞き流す事など出来ない話題だ。

「それは、まだよく分からねえよ。けど一度だけ、オレを親父と勘違いして命を狙つてきやがつた。分かるのは、奴等が組織ぐるみで行動していると言つ事くらいだな」

「……組織だと…?」

組織という単語について言葉を荒げたコナンを、青子はぎょっと見下ろした。眉間に皺を寄せ、険しい顔で快斗の返事を待つコナンのその過剰反応には、言つた快斗も驚いている。

「あ、ああ。確かだぜ。奴等はオレを集団で狙つてきて、言つてたんだよ。『我々』だの『あの方』だのって。随分デカイ組織な印象受けたけどな」

「そ、そいつ等つ、黒い服着てなかつたか!？」

話し終わる前から、間髪いれずに食いついてくる様子に動搖しな

がらも、彼はその時を思い浮かべた。

頭に浮かんだ、あの彼らの衣装は……。

「い、いや……？ 黒くはなかつた、と思つけど……？」

圧倒されながら答えたしどろもどろした口調であったが、快斗は確かにその記憶を確信していた。父親を殺した奴等を、忘れる筈がないのだ。

快斗の様子を暫く見つめたコナンだが、少し落胆した雰囲気を見せる。

「奴等とは、違う、のか……？」

喰くコナンに寄せる視線は、様々なもの。

三人の中でも、唯一その事情を全て知っているのは平次のみだ。快斗は不思議な顔でコナンを眺め、青子に至っては、何がどうなっているのか全く理解できていない。そもそも、青子はコナンの正体を知らないのだから、まあ当然の反応だ。

「お待たせー！ 買つて来たよ。あ、アレ、青子ちゃん……？」
「どないしたん？ すぐに追いつくって言つてたのに」

微妙な空氣から生まれた静寂を打ち破る明るい一人の声に、四人は振り向いた。

その場に居る青子を不思議そうに見つめる一人の視線で、青子は

ようやく”すぐ追いつく”とした約束を思い出す。

「「」「ごめんね！ ちょっと色々あって。蘭ちゃんも和葉ちゃんも、一人で大変だったでしょ」

慌てて、二人が両手に抱えた六人分のジュースの三分の一を受け取り、謝った。

青子の頭は未だ混乱していた。しかし、とりあえずの即興笑顔を浮かべる。

謝られた二人には別に怒っている様子はなく、また彼女達もジュースを渡しながら青子に言った。

「気にしないで。私達も青子ちゃん来ないみたいだからって帰つてきちゃつたんだし」

「そや。別に何とも思つてへんから安心しい。それより、ジュースが生ぬるくなる前に飲んでしまお？ 平次のはコレやな？」

「そうそうー エーッと、コレがコナン君ね」

六人は一斉にフルタブに手をかけた。

乾いていた喉をちゅうどよく潤すジュースは、殆ど一気飲み。空き缶はほんの十数秒のうち空になつた。

一息ついたら微妙な氣まずさと緊張があつた四人の間の雰囲気もいつの間に消え、また再びパンフレットを覗き込む。

「じゃあ快斗！ もいつかい、おさかなコーススター行こりよ

「ちょっと待て、冗談じゃねーよ！」

「面白かつたんだからー。じゃあ、多数決ねー おさかなコースターにもう一回乗りたい人ー！」

快斗への嫌味が大方の理由だろう。すぐに青子に賛同したコナンを見て、平次もまたそれに乗った。

「おー、コラ！ めめーらー！」

顔を引きつらせながら怒鳴った快斗に少し遠慮しつつ、蘭と和葉も青子側に一票入れる。

「い、ごめんね黒羽君……結構楽しかったの」

「せや！ 黒羽君も今度は一緒に乗ってみたらええんちゃう？ 魚嫌い克服できるかも知れへんやん」

「ね？ ほーら快斗。多数決で決定！」

悪戯っぽく微笑む青子に、ただただ顔を引きつらせた快斗。けれども、そんな時間すらも快斗にはありがたかった。正体を知られた先には、もつと氣まずさ漂う雰囲気が待っていると、ずっと思っていたのだ。

嫌そうに抵抗して引きずられながらも、心のどこかで幸せを感じる自分が居る事に、快斗自身も気づいていた。

そう、一時休戦。先程の話題には、四人誰も触れる事なく楽しい時間だけが過ぎていった。おさかなコーラスターでげつそりした快斗にも、その前通りのような反応が返る。

キッドに対しても、変わらず快斗として接する時に、彼は柄にもなく感謝すら覚えた。

帰り道、前を歩く蘭たちの田を盗んで、青子は快斗に、そつと話

しかけた。

「あのや。青子、あれからずーっと考えてたんだけどね、お父さんにも誰にも、やつぱり言わないから」

「へ？」

あまりに唐突な話に、一瞬快斗自身の感いを隠せない。彼女は真剣な表情で続けた。

「でも、条件はあるのー。これだけは約束して。絶対に、いつも生きて帰つててくれるって……それから、パンドラを壊したら、もうキッドは辞めるって」

「あ、青子？」

聞き返すと、苦しげに唇をかみ締めた青子は、少し視線をずらした。

「だつて、青子分かるんだもん。快斗が、キッドが、どれだけ盗一さんを好きだったか……小ちやい頃から、ずっと知つてるから！それに、どうしたつて仕方ないじゃない。そんな事情だったら、簡単に自首してなんて言えないよー」

「でも、オメー……」

「だつて、キッドは快斗が盗一さんの為に見つけたたつた一つの正義でしょ？ それに……それに青子、やつぱりどうしたつて、快斗が居なくなるのは、悲しいから」

その言葉に至るまでの葛藤を、快斗はしっかりと理解している。上田遣いに自分を見つめる青子が、どんな思いで居るのかという事も。田を閉じて、数秒だけ。青子が、言った言葉を心に反復させた。

「……絶対どこにも、居なくならねーよ。……約束だ」「うん！ 約束だからね！」

快斗の答えに、青子はようやく嬉しさ一杯の笑みで頷いた。彼女の、花がぱつと咲くような可愛らしさに、つい快斗自身顔が緩む。いつからこんなに可愛くなつたのか、と必死で考えながらも、快斗は優しく微笑み、出された小指に自身のそれを絡めた。

「す、ぐ熱いね、快斗兄ちゃん達！」

「ほ、ボウズ！？」

「コナン君！」

いつの間に足元に居たのか。冷やかしからかいつよに笑つたコナンに、快斗と青子の一人は一瞬で耳まで赤く変化した。

「コナンは、笑顔のままぐつと快斗の服を自分の元へ引き寄せた。

「な、なんだよ？」

「いいから、快斗兄ちゃん。耳貸して！」

子供のような無邪気な笑顔と裏腹、そのすそを掴み引っ張る力はもの凄い。その力だけで、コナンの口元まで耳をおろされた。

「コナンは、青子に聞こえないよう、手を添えて囁く。

「安心しりよ、誰にもオマーの事はばらさねーから。親父さんの殺されたって事件、オレ達も協力してやるよ……但し、オマーがただの黒羽快斗で居る時だけはな。怪盗キッドにはオレ達は容赦しねえ。次こそはぜつて一捕まえてやつから、そのつもりでいろよー。」

「…………名探偵…………」

快斗がコナンの顔を覗くと、そこには凄く挑戦的で不敵な、探偵

の顔がある。

「それが、服部とオレの決めた結論だ」

それを聞いた快斗の顔にも、つられるように挑戦的な笑みを返した。

「ああ、オレも容赦してやらねーから、覚悟しちつよ? カ探偵……」

5th・全てを知った先にあるもの。（後書き）

こんばんは～＼第5話、Hピローグがなければ事実上の最終回です！
頑張つて加筆エピソードができるといいな～＼前どおりのしょぼさ
になりませんよ～＼じつ～＼

と語つわけで、有難う御座いました！

次話にて、また最後のご挨拶をお会いできれば幸せです～＼

「あーあ、またハズレか！」

そこは、美術館の屋上。白い手袋の間から輝くのは、ブルーサファイアのビックジュエル。だが、今夜もまたそこから赤い宝石は見えない。完全なハズレだ。

先日の、ミーンルートといい、本命がことりとく外れるところのはじうにも空しい。

ただ、蒼い月が照らす宝石の光は、先日同様美しい。ハズレなどという言葉一つで終わらせるのは、失礼な事かも知れない。

暫くそこで宝石の光に見惚れていたが、下の階に繋がる扉が勢いよく開いて振り向いた。
戸を開けた小さな姿が、ハアハア息切れしている姿に、キッドは思わずニヤリとした。

「よお、名探偵！」

声をかけると、彼はむつとした表情を浮かべる。

「それ、いらねーんだろ？ サッセと返せ！」

「へいへい。今回もまたオレのシナリオ通りの展開だからって、んな不機嫌面すんなよ」

鼻で小さく笑って、キッドは彼の元へビックジュエルを放り投げた。慌てて受け取ったコナンは、そのまま靴のダイヤルに手を持つ

ていく。

「うせーな、これからが本番なんだよ。言つただろ？ キッドの前を次こそはぜつて一捕まえてやるつて」

バチバチと稻妻が走るような音を上げるコナンの右足の先には、先程から置いてあつた子供用のゴムボールがある。屋上は一般解放されているから、小さな子供が遊んだ時のものを放置されてあつたのだろう。

「望むどこりだぜ、オレを捕まえてみな？ 名探偵？」

「ああ、ならそのリクエストに応えてやるつじやねーか」

そう答えたキッドも、背広の中からトランプ銃を取り出し、コナンに向かた。双方が不敵な笑みをぶつけ合つその間に、冷たい風が吹く。

コナンが蹴つたゴムボールをひらりとかわしたキッドが、トランプ銃をコナンの足元めがけて一発、三発と放つ。それもまた飛ぶようにして避けながら、コナンはボール射出ベルトに手をかけた。

その瞬間、キッドの顔に深い笑みが刻まれる事に気づいたのも、束の間だ。

「Game overだ、名探偵？」

「う、わつー？」

膨らんだボールがいつもと少し様子が違う事を考えても、既にそこに当たる寸前の足を引き下げる事など出来なかつた。

シユーズの力で増強されたキックによつて、パン、と破裂したボールから、ピンクの煙幕が吹き出た。そして、同じく破裂と同時に

漏れた液体がもう靴にかかり、着地と同時に足を滑らせた。

「つて……くそ、オイルか！」

「ふ、傑作だぜ。煙幕ありがとう！ では、またいすこかでお会いしましょう、名探偵！」

煙幕の向い側の煙が動く。

「へそつ、逃がさねーっつってんだろー！」

先程のゴムボールが近くに転がっている事を知っていたから、手探りでそれを見つけ出し、強引に蹴り飛ばした。

「ぎゃあッ！」

その叫びに、手応えを感じたコナンは勝利を感じて笑った。しかし、煙幕が晴れた先には、既にキッドは居なかつた。

代わりに、何か白いものが飛んでいる空から、ひらひらと紙が舞い降りる。

『ベルトのメンテナンス、使い心地はいかがじゃつたかな、新一君？ ある時は気さくな隣人博士の怪盗キッドよつ』

「コナンは、悔しさを感じながらむつり頬を膨らませた。

「最低だ、バーローッ！－！」

それと、同時刻。

「……いってえー！ くそ、最後まで油断ならねー奴だな」

ハンググライダーを広げ、飛び立とうと屋上の端に立った直後だつた。コナンのサッカーボールが直撃して、ハンググライダーを壊した上、キッドはそこから突き飛ばされた。

「あんなトコから落ちたって、そりゃ大した怪我はしねーだらうけど、危ねー奴だな！」

そう。その美術館は、建物自体あまり高くはない。しかも下は芝生だ、が。怪我位はさせられる事間違いなしのその状況に、キッドは顔を顰めた。

「しつかし、咄嗟にスチロールの人形つけた鳩飛ばしたのはいいけど、暗い中で誤魔化してくれてよかつたぜ」

木の枝に引っかかり、ぶらーんぶらーん、と左右に揺れながらキッドは一つ溜め息をついた。

数日後、江古田高校。

前日は中森警部が指揮する警察官達との宝石強奪合戦を繰り広げた。やはり、警部相手だとコナンが絡むよりもずっと仕事がやりや

すい。余裕の勝利を挙げた快斗は、早めに登校するなり机につつ伏し、気持ちよく目を閉じた。

深夜遅く仕事をしたため、殆ど寝てない睡眠不足を学校で解消しようという魂胆だ。

「ちょっと、快斗？」

「ん？ 何だよ。青子か。ふあああ……」

眠りにつきかけた所を起こされて、頭をかきながら欠伸を零す。顔を上げた先の青子は、朝から不機嫌モードまっしぐらだった。登校するなり、席に座っていた快斗に声をかけ、ジト目で睨む。

当然、快斗は怪訝に感じて首を傾げた。青子の目が据わる。

「今日の、新聞、見た？」

一語一語区切って言つ様子はやはり、怒り……といつかむしろ殺気に近いものが籠る。

「いや、まだだけど？ ……お前何怒つてんだよ？」

ついこの間、あれだけ理解したといった彼女と、前日の夕方も楽しく学校帰りの道で別れた。その翌日がこれ程機嫌が悪くなるというのはどういう事か。

悩む快斗に、彼女は今朝の新聞を突き出した。眠さが先に立つて、買つのを忘れた朝刊だ。

「えーっと……？」

”怪盗キッド、またまた登場！！ 無能な警察官達を翻弄し、華麗

に夜空を飛び回る。こつんやのキッド・キラーの少年が出て来ない限り、彼の向かう所、敵なし！？

でかでかとそつ書かれた下に、華麗に空を舞うキッドヒ、悔しそうに地囃駄を踏む中森警部（青子の父）がいる。

その、あまりの間抜けを加減に、快斗は思わず吹きだした。

「ぶつ、……いこじゅねえが、キッドのおかげでおじいさんになつたんだし？」

語尾を明るく高い声で言つた快斗の、ふわけた言葉に、青子はついにぶち切れる。

手にしていた新聞紙をぐしゃ、と丸め、快斗の顔面にぶち当てた。

「よくないわよーっ！　このバ快斗！…」

「何だよ、アホ子！」

快斗もぶつけられて赤くなつた額をさすり、ムキになつて声をあげる。が、しかし。

「…………お父さん、全部言つておいたんだからーーーーーー！」

青子が次に口にした叫びに、快斗は固まつた。

こんな時までそれを持ち出す青子はするといつづつ。が、それすらも青子の気持ち次第だと、顔を引きつらせながら頭を下げた。

「…………」「ひ、めんなれこでした、アホ子……こや、青子様」

その態度を見た青子は、一瞬きょとんとした顔を浮かべた後、悪戯っぽく一やりと笑つ。

「ふ～ん？ 分かればよろしい！……今度から、青子の言つ事何でも聞くのよ？」

勝ち誇つた顔でそう告げた青子に、頭を下げたままの快斗も何か言い返したい気分で一杯だった。しかし、刃向かうわけにはいかず、苦虫を噛み潰したように小さく「はい」と答えた。

「で、できる限り聞けるように、努力します……青子様」

「今、青子の事変な呼び方しなかつた～？」

ギロツと睨む彼女に、すかさず笑顔で首を振る快斗。そんな二人の姿に、教室内ではまた様々な言葉が憶測として飛び交った。

本当の事を打ち明ける事で、前よりも心が楽になつた。だが、同時に青子に握られた弱みは、恐らく一生効き続ける事になる。そして、前よりも一層激しさを増した某探偵の相手もまた気が抜けない。

これから受難な毎日を浮かべると、快斗は天を仰ぎ、大息をついた。

けれど、そんな波乱だらけの毎日は、あの蒼い月に照らされた宝石の如くキラキラと美しく輝いていて、笑顔耐えずふざけあつてんな時間は、何よりも大きな宝物だ。

これからもまた、蒼い月光の下で華麗に舞う白き姿は、月明かり
というスポットを浴びて人々の心を輝かせてゆく事だろう。

ED・やの輝きは宝石の如く（後書き）

こんばんはー 脣月です
というわけで、最後までお読みいただきまして有難う御座いますーー！
エピローグをお送りいたしました。

ああ、後書き打ちながら、右手の骨が痛いvvなぜ?
というわけで、今回何とか、加筆して出すことが出来ましたv
なんかね、うん。短編時代の終わり方じゃちょっとあつけなさ過ぎ
だろうつて気持ちが、元の話を作った当初からずーっとあつたんで
す。

なので、入れるとしたら、ラストにコナンとキッドとの対決をプラスしたい！という気持ちが何とか叶った瞬間といいますかvv
本人、何とかまともな対決がさせられたと思っているのですが、あ
んまり頭使うの苦手なので、それが逆に違和感が生まれたらやだな
あ（^ーー^；

蒼い月の光というタイトルに見合つた終わり方に、今度こそはして
やるぞ！と思っておりましたが、いかがでしたでしょうか（^ー^）
もしも、楽しいと思つてくださいました方が居るのだとしたら、凄く幸
せですvv

扱いがあまり得意でないキッド様ではあります、何とか頑張らせ
ていただきましたv

そして、頂いたお言葉にもまた改めて嬉しくレスをつけさせていた
だきますねv私としては、いつでも大歓迎ですv

短編とはまた違つた雰囲気のお話として、その頃より新鮮な思いで
見ていただけたとしたら、私はとても幸せですーー！

本当にラストまで、有難う御座いましたーっ！
また、次回作や他の作品などでも、是非お会いしましょう♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7633c/>

蒼い月の光 ~Blue Moon Night~

2010年10月8日21時39分発行